

「養護性 (nurturance)」に関する一研究

—— 幼児を持つ母親と未婚大学生の専攻別による比較 ——

中西由里・粟津幹子*

A Study about Nurturance

Yuri NAKANISHI and Mikiko AWAZU

I 問 題

「母性」と言う言葉が我が国で初めて使用されたのは大正の初めのことであるという(大日向, 1988)。英語の motherhood, maternity にあたるスウェーデン語の moderskap の訳語として登場したとのことである。これが、今日では、特定の専門用語ではなく、日常生活で誰もが使用する一般的な用語となっている。手元にある辞書で「母性」及び「母性愛」を引いてみると以下のように説明されている。

「母性：女性が母親として持つ性質。子どもを守り育てようとする母親の本能的な性質。母性愛：母親が子どもに対して持つ本能的な愛情。」(尚学図書編 国語大辞典 1981)。

「母性：女性が母として持っている性質。また、母たるもの。母性愛：母親が持つ、子に対する先天的・本能的な愛情。」(新村出編 広辞苑 1991)

ちなみに同じ辞書で「父性」と「父性愛」についても調べてみると、「父性」は見つかるが、二つの辞書とも「父性愛」という項目はなかった。

「父性：父としての性質。父として持つ気持ち。」(尚学図書編 国語大辞典 1981)

「父性：父として持つ性質。」(新村出編 広辞苑 1991)

母性と父性の二つの用語を比較すると、母性にも「本能的な愛情」という記述があることに気づくであろう。一般的にも、父性本能という言葉を目にするのはあまりないが、母性本能という使われ方はよくされている。

では、はたして母性は本能なのであろうか。結論を先に言えば、母性は本能ではないというのが、最近の心理学や社会学の考え方であろう。フランスの哲学者、Badinter, E. (1980) は、18世紀のフランスでの子どもの養育をめぐる状況、すなわち、実母により養育される子どもはほんのわずかであったことなどを資料で示しながら、母性を無くなったり、つけ加わったりするもの、つまり、本能ではなくプラス・ラブと述べている。母性が本能であるならば、環境要因によって変化するものではないはずであるが、人間ばかりではなく、霊長類やサルにおいても、母親の育てられ方が自分が行う育児に影響するということが

* 元人間関係学部非常勤講師

Harlow, H. F. の一連の研究 (Harlow, H. F., 1959, 1971など) でも明らかにされているし、動物園などで人口保育を受けた動物が子育てができないこともまたよく知られている事実である。

「母性」について現在では、「母性本能」という言葉に表されているような生得的なものではなく、育ち・育てられ・開発されるものという捉え方によって変わってきている (前述の大日向(1991)は「母性対父性」の対立ではなく、両者を統合した「育児性」という概念を提唱している)。

ところで、「母性」という言葉は女性に特有のものとのイメージを与えるが、それをより広い概念である養護性 (nurturance) の1側面としてとらえることは、親となる過程を人間の発達の初期から始まるものと考え、さらに母親性とならんで父親性をも問題にする道を開く。養護性とは「相手の健全な発達を促進するための共感性と技能」と定義される (Fogel, A. D., Melson, G. F. & Mistry, J. 1986)。それは生きとし生けるものに対する慈しみと育みの心と技能を指しており、広い年齢範囲の男性・女性に適用できる概念である。小嶋・河合 (1988) は幼児・児童の養護性の発達についての研究を報告している。

小嶋 (1991など) は、未婚の大学生女子における養護性の構成成分を分析して、その中心をなすのは、A)赤ん坊・子どもへの興味、B)子どもをうまく扱える自信、そしてC)積極的な養護的役割の受容であることを見出し、それと本人の社交性、母親像、父親像、これまでの対人的接触の経験との関係 (ただし、その相関係数は低い) を報告している。これらの変数は、もともと女性が妊娠・出産の過程を辿り、また育児に関わっていく過程と関連するという想定で選ばれたものであった。すなわち、一方では養護性や子どもに対する意識や態度、対人関係の性質などは、妊娠・出産・育児の過程を辿る女性のあり方をある程度予測できると考えられる。しかし他方で、子どもを生む前に抱いている子どもに対する構えや子どもとの (予想した) 関係と、実際に育児に関与しながらのそれとははずれが生じる可能性があるし、また母親が必要とする社会的支援体制の性質・機能も変化していくと予想される。養護性という概念を中心に据え、それと関係する諸条件も含めて、出産・育児の過程における連続性と変容を本格的に調べた研究はまだきわめて少ない。したがって、どのような変数を取り上げ、それをどのようにして調べると有効にに関する情報が乏しい。このような段階でまず必要とされるのは、後の組織的研究を導くための探索的研究である。

II 目 的

本研究では、養護性に関する研究の第一歩として、まず、幼児を持つ女性 (母親群)、女子大学生、男子大学生など、既婚女性と未婚女性や未婚男性である男子大学生の養護性に関して横断研究によって比較・検討することを第一の目的としたい。また、大学生に対しては各自の大学における専攻によって養護性の質的差異があるのかどうかについても併せて検討したい。

Ⅲ 方 法

1) 調査用紙の作成

調査項目は、女子青年の養護性について調べた小嶋 (1991) が用いた調査項目を利用した。調査用紙の構成については表 1 に示した (母親群にはこの46項目に対人関係に関する15項目をつけ加えた計61項目からなる調査用紙を用いた)。また、この他に、被調査者の年齢や家族構成 (核家族か否か) や日常生活における子どもとの接触の有無等についても回答を求めた。

表 1 養護性を測定する質問項目の構成

尺度の内容	肯定的な意識	否定的な意識
1. 赤ちゃん・子どもへの興味……12項目	8	4
2. 子どもをうまく扱える自信……6項目	4	2
3. 積極的な養護的役割の受容……6項目	4	2
4. 福祉活動への関心……4項目	3	1
5. 子ども時代の追憶……6項目	5	1
6. 動物に対する関心……3項目	2	1
7. 植物に対する関心……2項目	2	0
8. 母親像……4項目	2	2
9. 父親像……2項目	1	1
10. その他……1項目	0	1

2) 被調査者

母親群：愛知県 A 市内の私立幼稚園に子どもを通園させている母親102名で平均年齢は33.3歳であった。

女子学生群：岐阜県内の私立 B 女子短大2年生で、食物栄養専攻35名、養護教諭コース34名、英語コース31名及び幼児教育専攻の1年生82名；愛知県内の私立 C 大学 (共学) の情報科学・社会学専攻の女子学生121名、同じく愛知県内の私立 D 大学 (女子大) の人間関係学専攻の1年生147名であった。

男子学生群：愛知県内の私立 C 大学 (共学) の情報科学・社会学専攻の1年生83名であった。

被調査者の内訳については表 2 に示した。

調査は1991年10月から11月にかけて実施された。

3) 調査の分析方法

小嶋 (1991) では、未婚の大学生女子における養護性の構成成分を分析して、その中心をなすのは、尺度 1 の「赤ん坊・子どもへの興味」、尺度 2 の「子どもをうまく扱える自信」、尺度 3 の「積極的な養護的役割の受容」であることを見いだしている。そこで、今回の分析では、この 3 尺度に限定して結果の分析を行うこととする。この 3 尺度の質問項目を表 3, 4, 5 に示した。調査への回答は 3 件法 (はい, どちらでもない, いいえ) で求めた。

「はい」「どちらでもない」「いいえ」それぞれに2点, 1点, 0点を与え, 逆転項目は, 0点, 1点, 2点とした。それぞれの群の, 尺度ごとの合計得点と分散を計算した。

表2 被調査者の内訳

被調査者	学生の専攻		人数	平均年齢
母親群			102	33.3
女子学生群	短大	幼児教育	82	18.7
		食物栄養	35	19.7
		養護教諭	34	19.7
	4大	英語	31	19.5
		情報・社会	121	19.3
		人間関係	147	18.8
男子学生群	4大	情報・社会	83	19.0

表3 尺度1の質問内容

-
- * 1) 赤ちゃんを見ても, 別にかわいいとは感じない。
 - * 2) 赤ん坊の泣き声を聞くとイライラする。
 - 3) 幼い子どもの瞳に引きつけられるものを感じる。
 - 4) テレビに赤ちゃんが出てくると興味をもって見る。
 - 5) 子どもの心の動きに興味がある。
 - 6) 幼い子どもが泣いていると何とかしたいと思う。
 - 7) 幼児の姿をつい目で追っていることがある。
 - * 8) 子どものことよりも青年の生活と心理に興味がある。
 - 9) 子どもが遊んでいるのを見るのはおもしろい。
 - 10) 小さい子どもに頼られるとうれしい。
 - 11) 遊んでいる子どもの歓声をうるさいと感じる。
 - 12) 保育所の前を通りかかると, 中をのぞきたくなる。
-

*は逆転項目

表4 尺度2の質問内容

-
- 1) 幼児の相手をうまくやれると思う。
 - 2) 小学生の遊び相手になれそうである。
 - * 3) 小さい子どもの相手は苦手である。
 - * 4) 子どもはあまり好きにはなれない。
 - 5) 小さい子どもの世話には自信がある。
 - 6) 子どもっておもしろい存在だと思う。
-

*は逆転項目

表5 尺度3の質問内容

1) できれば自分も親となって子どもを育てようと思う。
2) 将来、親になったときのことを想像することがある。
* 3) 子育てにはいろいろわずらわしいこともあると思う。
4) 自分は子どもを育て、よい親になろうと思っている。
* 5) 将来、子どもをうまく育てられるか心配である。
6) 自分は将来、わが子に慕われる親になれる気がする。

* は逆転項目

IV 結 果

各尺度毎の各群間の比較を行い、次に性差をみるために同一専攻である情報学・社会学コース生の男子学生と女子学生の比較を行った。

1) 尺度1：赤ちゃん・子どもへの興味

各群別の平均得点と分散を表6に示した。表から明らかなように、平均得点は、高い方から、幼児教育専攻生（以下幼教群と略す）、養護教諭コース生（以下養護群と略す）、母親群、人間関係専攻生（以下人間群と略す）、情報学・社会学専攻生（以下情社群と略す）、食物栄養コース生（以下食栄養群と略す）、英語コース生（以下英語群と略す）、男子大学生群（以下男子群と略す）の順であった。

表6 尺度1の各群別の比較

	母親群	女子学生群						男子学生群
		幼 教	食 物	養 護	英 語	人 間	情・社	
平均	19.4	20.1	15.5	19.8	14.6	16.4	16.1	11.2
分散	11.5	13.8	26.0	8.2	31.3	22.9	30.0	22.7

次に、母親群と学生各群の比較を行ってみた。その結果、母親群は、食物群 ($t=5.11, p<.001$)、英語群 ($t=5.84, p<.001$)、人間群 ($t=5.45, p<.001$)、情社群 ($t=5.28, p<.001$)、男子群 ($t=13.64, p<.001$) よりも有意に高かった。母親群と幼教群 ($t=-1.33, n.s.$)、養護群 ($t=-0.618, n.s.$) の間には差がなかった。

また、学生群の中で、得点が高かった幼教群と養護群をそれ以外の学生群と比較した値を表7に示した。表に示されているように幼教群と養護群の間の差はなかったので、両群とも同程度の得点であるといえる。また、幼教群、養護群は他の各群よりも有意に得点が高かった。

表7 尺度1についての学生各群の比較

t 値	幼教	食物	養護	英語	人間	情社	男子
幼教		5.46***	0.42	6.06***	6.05***	5.77***	13.37***
養護	-0.42	4.30***		4.78***	3.98***	3.79***	9.81***

*** $p < .001$

2) 尺度2：子どもをうまく扱える自信

各群別の平均得点と分散を表8に示した。平均得点の高い方から、養護群、幼教群、母親群、人間群、食物群、人間群、英語群、情社群、男子群の順であった。ここでも、母親群と学生各群を比較してみると、母親群は、幼教群 ($t=-3.04, p<.01$)、養護群 ($t=-3.23, p<.01$) よりも有意に得点が低く、情社群 ($t=2.09, p<.05$)、男子群 ($t=4.68, p<.001$) より有意に高かった。母親群と食物群 ($t=-0.19, n.s.$)、英語群 ($t=0.90, n.s.$)、人間群 ($t=0.54, n.s.$) との差はなかった。

表8 尺度2の各群別比較

	母親群	女子学生群						男子学生群
		幼教	食物	養護	英語	人間	情・社	
平均	8.2	9.3	8.3	9.7	7.7	8.0	7.4	6.2
分散	6.4	5.4	9.5	2.9	10.3	9.8	9.5	10.8

表9 尺度2についての学生各群の比較

t 値	幼教	食物	養護	英語	人間	情社	男子
幼教		1.93	-0.91	2.93	3.29	4.74***	6.99***
養護	0.91	2.33*		3.18	3.06	4.17***	5.88***

* $p<.05$ *** $p<.001$

尺度1同様に、得点の高かった幼教群、養護群とそれ以外の学生各群の比較をした値を表9に示した。尺度2においても幼教群と養護群の差はなかったので、両群とも同程度の値だったといえる。各群間の比較では、幼教群は情社群、男子群よりも有意 ($p<.001$) に得点が高かった。また、養護群は食物群 ($p<.05$)、情社群、男子群 ($p<.001$) よりも有意に高かった。

3) 尺度3：積極的な養護的役割の受容

各群別の平均得点と分散を表10に示した。平均得点の高い方から、養護群、幼教群、母親群、食物群、英語群、情社群、人間群、男子群であった。尺度1, 2同様に母親群と学生学群との比較を行った。その結果、母親群の方が人間群 ($t=2.93, p<.01$)、男子群 ($t=4.97, p<.001$) よりも有意に値が高かった。母親群と幼教群 ($t=-1.27, n.s.$)、食物群 ($t=0.58, n.s.$)、養護群 ($t=-1.51, n.s.$)、英語群 ($t=0.89, n.s.$)、情社群 ($t=1.17, n.s.$) との間有意差はなかった。

尺度3においても幼教群、養護群とそれ以外の群との比較を行い、その結果を表11に示した。表からも明らかなように、幼教群、養護群、食物群の間には有意差はなかった。幼教群は情社群 ($p<.01$)、人間群・男子群 ($p<.001$) よりも有意に値が高かった。また、養護群は人間群 ($p<.05$)、男子群 ($p<.001$) よりも有意に高かった。

「養護性 (nurturance)」に関する一研究

表 10 尺度 3 の各群別比較

	母親群	女子学生群						男子学生群
		幼 教	食 物	養 護	英 語	人 間	情・社	
平均	7.1	7.4	6.9	7.6	6.8	6.4	6.8	5.6
分散	2.5	2.6	4.5	3.7	3.3	4.1	4.6	6.2

表 11 尺度 3 についての学生各群の比較

t 値	幼教	食物	養護	英語	人間	情社	男子
幼教		1.39	-0.57	1.70	3.84***	2.15*	5.50***
養護	0.57	1.43		1.72	3.14**	1.96	4.19***

* p<.01 ** p<.05 *** p<.001

4) 性差の比較

性差を検討するために、大学で同じ情報学・社会学を学んでいる女子学生と男子学生の比較をした結果を表12に示した。尺度1, 2, 3いずれにも女子学生の方が男子学生よりも有意に得点が高かった。

男子学生について子どもとの接触経験の有無と各尺度得点とを比較したものを表13に示した。尺度1, 2とも日常生活で子どもとの接触経験のある人の方が有意 (p<.05) に得点が高かった。

また、子どもとの接触経験のない女子学生と男子学生を比較したものを表14に示した。その結果、尺度1において有意差 (p<.001) がみられた。

表 12 同一専攻の女子学生と男子学生の比較

		尺度 1	尺度 2	尺度 3
女子	平均	16.1	7.4	6.8
	分散	30	9.5	4.6
男子	平均	11.2	6.2	5.6
	分散	22.7	10.8	6.2
t		-6.61***	-2.65**	-3.67***

** <.01 *** p<.001

表 13 子どもと接触経験の有無による比較(男子学生)

子どもとの接触	尺度 1	尺度 2	尺度 3
有り	12.5	7.1	6
無し	10.4	5.6	5.5
t	-2.02**	-2.10**	-0.90

** p<.05

表14 女子学生と男子学生の比較：
子どもとの接触経験無し

	尺度1	尺度2	尺度3
女子	15.7	7.7	6.5
男子	10.4	5.6	5.5
t	-4.47***	0.54	0.12

*** p<.001

V 考 察

1) 母親群と学生各群の比較から

表6からわかるように、尺度1「赤ん坊・子どもへの興味」については、有意差はないが母親群よりも幼教群、養護群の方が若干高い値を示している。幼教群は幼児教育専攻、つまり幼稚園の先生や保母をめざしている学生なので赤ん坊や子どもへの興味・関心が高いのはむしろ当然なのであろう。養護群は養護教諭養成コース、つまり小・中学校の保健室の先生の養成課程の学生なのだが同様に赤ん坊や子どもへの高い関心を示している。しかもこの群は分散の値も小さいことから得点分布のばらつきも8群の中で最も小さいのである。母親群、幼教群、養護群の尺度1得点の最大値、最小値を示すと、順に、(24, 9)、(24, 6)、(23, 12)であり、養護群の最小値が高いことがわかる。看護学専攻学生に本研究の質問紙と同一の調査を行った河合ら(1992)の報告によれば、将来看護婦をめざしている学生でも、将来の志望専攻(内科、外科、小児科など)の違いによってそのプロフィールは著しく異なるという。養護教育コースは、将来の職務で扱う対象が児童・生徒であることから、子どもへの関心が高く、養護性の高い学生が集まっているのであろう。

また、尺度2の「子どもをうまく扱える自信」について、実際に子どもを持ち、日々子どもと接している母親群よりも、幼教群、養護群の方が尺度得点が有意に高かった。子どもと接する職業を志している学生は既に在学中から「子どもをうまく扱う自信」を持っているといえる。ただ、実際に子どもと接した後にこの値がどう変化するかについては今後検討しなければならないだろう。調査実施の時期からすると、養護群の学生は既に教育実習を体験済みであるのだが、幼教群の学生は1年生であり、幼稚園・保育園実習体験前である。同一の被調査者に対して1年次と2年次にこの調査を実施し、実習体験後の変化について今後検討する必要があるだろう。

尺度3の「積極的な養護的役割の受容」に関しては、尺度1, 2ほど各群の差が明確には示されなかったが、ここでも母親群よりも幼教群、養護群の方が高い値を示していたが有意な差ではなかった。

2) 学生の専攻による比較

表7, 9, 11に示したように学生の専攻によって、養護性の構成成分である、「赤ん坊・子どもへの興味」、「子どもをうまく扱える自信」、「積極的な養護的役割の受容」の得点分布に大きな差が見られる。将来、子どもと関わる職業である幼稚園教諭や保母、あるいは

養護教諭をめざす幼教群や養護群は他の各群と比較して際だって高い得点を示している。一方、同じ女子学生でも英語や情報学・社会学を専攻している学生は養護性という点では比較的低い得点を示している。子どもに関することを学びたいと希望する学生、子どもに関する職業を志向する学生はそうでない学生よりも一般に養護性が高いといえるだろう。

3) 性 差

表6～11で明らかのように男子学生は女子学生に比べて尺度1～3のどの得点も際だって低い。そこで、同じ専攻の女子学生である情社群と男子群の比較を行ってみた。表12に示されているように、尺度1, 2, 3全てに女子学生の方が男子学生よりも有意に得点が高かった。青年期の男子学生は女子学生にくらべ、養護性が低く、また子どもへの関心も低いといえよう。

日常生活での子どもとの接触の有無と各尺度得点との比較を表13に示してあるが、女子学生の場合は接触経験の有無によって各尺度の得点間に有意な差がみられなかったが、男子学生の場合は尺度1, 2において接触経験のある人の方が有意 ($p < .05$) に得点が高かった。男子学生の場合は子どもとの接触経験が「子どもへの興味」や「子どもをうまく扱える自信」に影響していることがわかった。

また、表14では、子どもとの接触経験の無い女子学生と男子学生を比較しているが、子どもとの接触が無くても女子学生の方が男子学生よりも有意 ($p < .001$) に「子どもへの興味」の得点が高かった。女子学生よりも男子学生の方が子どもとの接触経験が「子どもへの興味」に強く影響しているといえる。

4) ま と め

幼児を持つ母親と未婚の女子学生、男子学生を対象にして「養護性」を「子どもへの興味」、「子どもをうまく扱える自信」、「積極的な養護的役割の受容」という観点から比較・検討してみた。学生の場合、大学での専攻によって養護性の高低の差が顕著に示された。子どもに関わる専攻を選んだ学生は一般にそうでない学生よりも養護性が高かった。また、男子学生は女子学生に比べ、どの尺度においても有意に得点が低かったが、男子学生の中で比較・検討すると、日常的に子どもとの接触経験をもっている学生の方が有意に得点が高かった。女子学生よりも男子学生の場合、子どもとの接触経験の有無がより強く養護性の得点に影響を与えていた。筆者ら(中西他, 1992)は、妊婦を対象に縦断的に同様の調を行っているが、学生群についても、前述したように追跡研究を行い、在学中の、たとえば、教育実習というような経験による養護性の構造の変化を研究する必要があるだろう。

文 献

- Badinter, E. 1980 *L'Amour en Plus*. Librairie Ernest Flammarion. (鈴木晶訳 プラス・ラブ サンリオ 1981)
- Fogel, A. D. & Melson, G. F. 1989 マカールペン美鈴訳 子どもの養護性の発達 (小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界 有斐閣 170-186)
- Fogel, A. D., Melson, G. F. & Mistry, J. 1986 Conceptualizing the Determinants of Nurture: A

- Reassessment of Sex Differences, (Fogel, A. D. & Melson, G. F. Eds.
ORIGINS OF NURTURANCE, Lawrence Erlbaum Associates. pp53-67)
- Harlow, H. F. & Zimmermann, R. R. 1959 Social Deprivation in Monkeys, *Science*, 130, No. 3373,
421-432 (古浦一郎訳 サルの環境への適応 別冊サイエンス 心理学特集 不安の分析
日本経済新聞社 1972)
- Harlow, H. F. 1971 LERNING TO LOVE Albion publishing Company (浜田寿美男訳 愛のな
りたち ミネルヴァ書房 1978)
- 河合優年 他 1992 看護学生の養護性 私的研究会の発表資料
- 小嶋秀夫・河合優年 1988 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究
昭和62年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書
- 小嶋秀夫 1989 養護性の発達とその意味(小嶋秀夫編 乳幼児の社会的世界 有斐閣 187-
204)
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解(我妻 堯・前原澄子編 母性の心理・社会学 医学書院
79-111)
- 中西由里・粟津幹子・小嶋秀夫 1992 育児期の女性の心理に関する縦断的研究-妊娠中の「養
護性」と「対人関係」に関する意識の分析を中心に- 日本発達心理学会第3回大会発表論
文集, 119。
- 大日向雅美 1982 母性を問い直すとき(佐々木保行・高野 陽・大日向雅美・神馬由貴子・
芹沢茂登子著 育児ノイローゼ 有斐閣 132-154)
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 大日向雅美 1991a 母性をめぐる現状と課題(我妻 堯・前原澄子編 母性の心理・社会学
医学書院 1-30)
- 大日向雅美 1991b 「母性/父性」から「育児性」へ(原ひろ子・館かおる編 母性から次世代
育成力へ 新曜社 205-229)
- 尚学図書編 1981 国語大辞典 小学館
- 新村出 編 1991 広辞苑第4版 岩波書店

付 記

本研究のデータ収集に関しては人間関係学部人間関係学科心理学専攻第3回生の梶原昭子さん、
林由紀子さん、外山美佐子さんの協力を得ました。記して感謝の意を表します。